二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

背徳の退魔少女 殺

小説 倉田シンジ
挿絵 うばにす

序章 006
第一章 綻び 025
第二章 沈滞 066
第三章 ひび割れ 107
第四章 瓦解 151
第五章 淫獄の淵 208

登場人物紹介

Characters

浅葉(あさば) 霞(かすみ)

退魔刀を振るい魔を滅することを専門とする退魔師。退魔機関から派遣され、直樹と同じ学校に通いながら現れた魔を討つ。無口で、凛々しくクールな容貌。

諏訪(すわ) 直樹(なおき)

この地を守る神社に生まれた少年。妖魔と戦っていたところを霞に助けられ、その後は術符を用い霞のサポートに回っている。

檜垣(ひがき) あかね

直樹の幼馴染みの少女。神隠しに遭った際に霞たちに助けられ、日常生活に復帰している。

『第三章　ひび割れ』より

肉棒がびくびくっと小刻みに痙攣し、その一瞬後には唇から逆流した白濁が一筋流れる。
よく見れば霞の頬にはべったりと粘液が貼りつき……、それどころか黒髪のあちこちにも、はだけた胸元にも白いモノがこびりついていた。
「あ、新しく来た人？　順番だからもうちょっと待っててねー」
さっきトイレへ入ってきた一団に声をかけているのは、あかねだった。
ぼうっとして意識があるのかないのか分からない直樹に腕を絡めて支えながら、必死に奉仕行為を続ける霞を眺めてはたまに笑い声を上げている。
室内いっぱいの男子生徒と、仏頂面でフェラチオを続ける霞と、妙に明るいあかねの姿。どうにも理解のできない状況なのに、誰一人として疑問を口にする者はない。噂の美少女転校生から奉仕を受ける幸運に恵まれたことに興奮し、誰もが目の前の少女の乱れ姿に現実を忘れていた。
「はぁ、はぁ……」
霞は顎を垂れ落ちていく精液を指先で掬い、それをちゅぷっと口へ。精気を逃すまいと、味見するかのように吸い上げる。
（まだ……これじゃ足りない……）
あかねに連れられてここに押し込められ、言われるがまま生徒たちの相手をして数十分。これまで五人を射精させ精気を集めている。
だが、さっきの直樹の様子からするとこれではまだ足りないだろう。

ふと顔を上げると、目の前に立つ生徒の背後に何人もの男子の姿が見えた。
（こんな……大勢に……っ……！）
暗澹たる思いが胸を塞ぐ。
人数が多いことは生気を集めるには都合がいい。しかし、自分のこんな行為を認められるほど堕落したつもりもなかった。
「つ、次は俺な！」
下半身を高ぶらせて、次の生徒が個室内に割り込んできた。
ふとその顔を見て、見たことのある顔だと気付く。
（ああ……そうか。同じクラスの……）
直樹のための行為。クラスメイトにこんな姿を見られようと構いはしない――そう納得させようとしても、なぜか胸の奥がざわめく。無意識に顔を俯けていた。
「浅葉さんの噂って本当だったんだな。まさか君がこんなことするのが好きだなんてさ」
（……）
興奮で口早になった男子生徒がズボンを下ろし、ガチガチのペニスを突き出してきた。まだ半分ほど包皮をかぶった亀頭が顔の前にぶらぶらと揺らされる。
「こ、今度からは俺に直接言ってくれればいつでも相手してやるからさ……っう」
それ以上余計なことを喋らせまいとするように、霞は手を伸ばしてペニスを握り込んだ。
一瞬言葉を止めた男子生徒が、にやけた顔で見下ろしてくる。

（……く、こんなことぐらい……）
肉棒を握った少女の手がぐっと根元へ下ろされる。ずるっと包皮が剥け、ぷんと鼻を突く匂いが漂った。
数日前ならばそれだけで顔をしかめ、どうすべきか戸惑ってしまっていた霞。だが、好むと好まざるとにかかわらず手慣れてしまった彼女は、躊躇わずに舌を肉茎へ押し当てた。
「ん……んん……ふ」
「うぁ、ああ……あの浅葉さんが俺のを舐めてる……夢みてぇ」
歓喜の吐息を漏らす男子生徒がびくんと腰を跳ね上げる。
それを舌の腹で側面から押さえ、舌を上下に動かし、唾液を塗り込んで……亀頭を包むように舌をあてがう。強くなった匂いの元をこそげ落とすように、ぬめつく舌で亀頭を舐め上げ――唇を滑らすようにぐぷりと。
じゅぶぶ……。
温かいぬめりにペニスを包み込まれて、生徒が全身を震わせた。
「だめだ、我慢できねぇ。俺も……」
それを見ていた次の生徒がこらえきれずに個室内へ。
すでにはだけていた肉棒を少女の顔に押しつけ、柔頬を亀頭でぐりぐりほじる。
「んうっ！　んんーっ！　っは！　や、やめ……ろ」
目の前のペニスに専念していた霞が眉根を険しくして抗議の視線を向けた。が、

「あははっ、そうだねっ。どんどん処理しないといつまで経っても終わらないよっ」
様子を眺めていたあかねの声に瞳が揺れる。その声から悪戯めいた邪気は感じたものの、確かに一本ずつ処理していたのでは効率も悪く、なにより時間がかかる。それはつまり、直樹への生気供給が遅れるということだ。
睨み上げていた視線を揺らし……やがて霞は状況を受け入れたようにそれを伏せた。
「いいみたいだね。じゃ、次の人もどんどん個室へどーぞ」
あかねの言葉にもう一人が個室に入る。霞も合わせて四人の個室はそれだけでぎゅうぎゅう。お互いに押し合いながら少女の身体に密着しようとするせいでろくに身動きできないが、それでもなんとかペニスを少女へ向けようとしている。
「こ、これ以上……は……」
戸惑う霞の声を掻き消すあかねの声。
「まだいけるんじゃない？　どんどん射精して、おちんちん大好きな浅葉さんを精液まみれにしてあげてよ。すごーく悦ぶんだからっ」
煽るような言葉でもう一人が中へ。
ひとつの個室に五人ともなるとさすがに狭すぎた。あとから入った者は中に入ってペニスを少女に擦りつけるのが精一杯。倒れ込むようにして霞の肩に手を置いた一人が、そのままペニスを胸に押しつけてくる。
亀頭が少女の乳房を持ち上げるように、下乳をぐいぐい突き上げた。

一人の少女を囲むように四人の男。それぞれに形の違うグロテスクなペニスが霞を取り囲んで、顔にも腕にも乳房にも亀頭が滑る。
「うっ……こ、こんな……んんっ⁉　ぶ……ふぁ！」
だが、この状況に男子生徒の興奮はいやが上にも増しつつあった。
「ほら、俺のが最初だろ。舐めてくれよ！」
「んじゃ俺は手で頼むよ。さっさと握って……！」
まるで霞の身体を取り合うように、我先にと股間を押しつけてくる。
「ひぐ、ううっ……！　んむ……ぷは！　うく、ああうっ！」
唇に突き込まれた亀頭が喉まで塞ぐ。かと思うと他の者に押されてすぐに抜け出て、唇から跳ね出てずるりと鼻筋を駆け上がった。握ることを強要してくるペニスは手の平の上で何度も跳ね踊り先走りを二の腕まで飛ばしている。それにも交ざれなかった者はやたらめったらに腰を振りたくり、亀頭を乳房に押しつけようと奮闘していた。
「うわぁ、すごいすごい！　浅葉さん、あっという間にぐちょぐちょだよっ」
「ぐ、んむうううっ！　ひゃ、みんな、やめ……っぷ、んんっ！」
顔面を滑る亀頭のせいでろくに喋ることも、呼吸を継ぐことも難しい。
さっきまではあくまで表情薄く奉仕を続けていた凛々しい顔が、先走りの透明汁で一瞬のうちにネトネトだ。
「はぁ、はぁ、浅葉さん、すげぇいやらしい顔してるよ」

霞を中心に異常な興奮が広がっていく。無理やりに犯しているような獣欲が膨れ上がり、彼ら自身にも行為に歯止めをかけることができない。

ずりゅりゅりゅっ！　ぬちちっ……じゅぷぷ！

「あむ、んんく！　ふぁ、め……くふうぅぅ……！」

霞は暴れる肉棒をなんとか手の中に収めるだけで精一杯だった。半開きの口に入り込もうとする正面の生徒は自分で腰を振って止まりそうにない。さっきから乳房を押し上げている亀頭も同様、柔らかさを堪能しようと乱暴に押しつけられている。やっとのことで握った両手のペニスも動きを止めず、手の平から飛び出してはあちこちにぶち当たる。

「あう！　んぶっ、んむうぅぅ……ぷふぁ！　んんっ、ひゃ……！」

なにか訴えようとしても、突き出されるペニスが唇をめくり返して邪魔をする。顔を中心にそこかしこがヌルヌル滑り、額に塗りつけられた粘液がドロリと垂れて瞼を塞ごうとする。にちゃにちゃと直接響いてくる音で全身が包まれたようで。

「う、出ちまう！」

唇を飛び出た途端、びゅるるるっ！　と迸る精液の白濁。混乱した状況では当然口に受け止めることはかなわず、ねっとりとしたものが顔を縦断する。

「うぁぁっ！　くぅ……」

「あああっ、もったいないよっ！　ほらほら早く舐め取らなきゃ！」

笑い声に混じったあかねの命令に苛立ちが募る。霞は必死に口を開き、鼻から垂れてく

る白濁を舌の上に落とそうと試みた。
「おい、出したら交代しろよ！　次は俺がいくからな！」
だが、精液をほとんど回収できないうちから次のペニスが突き出されてくる。
「んぶううっ！　はぁう……ぐむぅっ！」
都合よく開口した少女の唇があっという間に剛直で埋まった。休む間もなくピストンが始まり、口の中に溜まっていた唾液と精液の混合物がぶちゅりと溢れる。鼻まで突き抜けてくる匂いで息を塞ごうとする。
ぶちゅっ！　ずるる……ぷちっ、ちゅくちゅくっ、にちちちっ！
（こんな状態じゃ……んっ、くあ……！）
かろうじて乳房を覆い隠していたブラジャーに暴れる亀頭が引っかかり、そのままずるずる持ち上げられていた。
ぶるんっと跳ね出てきた乳房の白さに魅せられて誰かの手が伸びてくる。手の平に余る柔肉の塊が絞り込まれ、むちっと溢れ出すような先端の桜色はすかさず亀頭に弾かれていた。プリプリした乳首からぞくっとする痺れが届く。
「ふうぅ！　っはぁはぁ……そ、そこは……んんっ！」
「ああっ、浅葉さんの乳首柔らかいよっ。ぷにぷにこりこりして……！」
思うようにペニスが押しつけられないのか、その生徒はくびり出された乳首を自分に引き寄せるように何度も絞り込みながら亀頭に押し当てている。

『第四章　瓦解』より

「どうしたの？　ずいぶん元気なくなっちゃったねー？」
一人明るいあかねの声が響き渡る。
「じゃあやっぱり、あたしが霞ちゃんを元気づけてあげないといけないかな……？」
宙に両足を広げていた霞の身体は、わずかに高度を下げ、今は床と胴を水平にして吊られていた。身体の胸側を下に、背を上にした体勢――重力に引かれ釣り鐘型の美しい形を垂らしている乳房を、あかねが脇から伸ばした手で握り込む。
「んっ……はぁ、はぁ……」
四肢をそれぞれ触手に吊られているせいで、わずかに身をよじるだけで全身が揺れる。それを押さえ込むように乗りかかってきたあかねに、霞は顔を向けない。
「んふふ……顔を見られたくないの？　まあ理由は分かるよ……あたしも同じだったもん」
手の平に乗せた乳房をたぷたぷと弾ませながら、あかねはもう一方の手を霞の股間へ。
「初めは嫌だったのに犯されるうちに気持ちよくなって、それが当たり前になって、だんだんもっとしてほしくなってきて……。霞ちゃんもそうだよねっ？」
ぐちゅりと握り込んだ恥丘ごと、あかねの手の平がぐにぐにと揉みこねる。じゅわっと溢れた愛液と必死の無言が、痛々しいほど彼女の言葉を肯定していた。
「だから、ほら見て？　今度はこれで霞ちゃんを犯してあげる」
ごつっと股間に当たってきた感触に思わず応えてしまった霞は……おそるおそるそれを確かめずにはいられなかった。

「うっ、あ……な、に？」
水平に吊られた霞の身体と、立ち上がったあかねの股間は同じくらいの高さだった。だからソレもあかねの生やした触手の類なのかと思われたが……少し違う。
「どう？　立派なおちんちんでしょ？」
自分でスカートを持ち上げたあかねの股間には、大きなペニスがそびえていた。彼女の知る数少ない知識からも、通常サイズの性器と比べてずいぶん大きく見える。
いや――形は似ているがペニスというには少しグロテスクだろうか。妙にブヨブヨしていて、なのに硬そうでもあり……触手によく似た肉質を持っているのが分かる。
「触手をちょっと合体させてね、霞ちゃん専用のおちんちんにしたの。さっきおま〇この中はさんざん調べたから、きっとぴったりハマると思うよっ？」
「え……!?　あ、くっ！　い、いや、無理……っ」
言うが早いか腰を押しつけてくるあかねの肉根が、すっかりほぐれていたヴァギナに頭を押しつけてくる。わずかの密着でみちみちと軋みを上げるような感触があり、霞はその太さに身を震わせてしまう。
目を見開き、首を振って拒絶する退魔少女。その腰が掴まれ、あかねはずりずりと前進。霞はますます表情をおののきに硬くして――。
亀頭の部分にあたる肉塊が、ぽこっと小さく開いていただけの膣口にぴったり密着。少し腰を押し出すだけでその穴はみるみる広がっていき……。

「ひっ！　いやぁ、あっ、んん……！　こ、こんなのが、本当に入って……っふぁぁ！」
愛液を押し出しながら、ペニスは確実に狭穴へと埋まりつつあった。
ずる……ぐぽぽっ！　ずちゅ……ぷぷ……！
「ひっあああああっ‼」
触手ペニスが亀頭を埋めた。普通より一回りは大きいペニスが、先っぽだけでも異常な異物感をもたらす。なのにあかねは遠慮なしに腰を進めてきて……、
ずぶぶっ、ぐり……！
「ひんんっ！　お、おおき……くるし……っはぁ！　はぁ、はぁ……っ！」
「そんなに嬉しいのぉ？　んふふっ、すぐ馴染むからねっ」
霞の経験が少ないことを差し引いても、とても入りきらないように思える大きさ。なのに、あかねの言葉を裏付けるように不思議と痛みは感じず、それどころか、
「んぅう……ふぅ、ふ……んんあっ！　はぁぁ……入ってくる……」
喘ぎ漏れる霞の声はうっとりして快楽に蕩けているようにも聞こえる。
「霞ちゃんの中すごいなぁ……。お汁でずるずるになってる肉ヒダが、ぎゅって吸いついてウネウネしてるの。とっても気持ちイイ……」
あかねは悦びを表すように腰をくねらせ、その勢いで膣壁がこりっ……。途端、霞の身体が弾ける。電流のように鋭く、そして甘やかな感覚が全身を走った。
「んふぁあああ！　はぁ、うぅ……い、いまの……ぉ」

男子生徒に代わる代わる尻を犯された時とも、細触手でまんべんなく膣内を撫で回された感覚とも違う。信じられないほどに刺激的で、耐えられないほどにもどかしい感覚。
「すっごく気持ちいいよね？　んふふ、あたしも気持ちいいんだよ？」
あかねがそう言っていた通り――霞のために調整されたペニスは、そこかしこに浮かぶ血管めいた突起で彼女の弱い場所をすべて責められるようにできていた。
だからほんの少し蠢いただけ、膣壁にペニスが擦れただけで……。
（あっ、あ――くる……ぅ!?）
下腹でざわあっ！　と盛り上がった快感が全身へと伝播。
足の指がぴくぴくしてしまう。頭の中が空っぽになった。頭の先までがじんわりとした性熱に包まれて、喉がひくつき――抑えられない。
「あひ、い……ひゃあああっ！」
退魔少女の口からあられもない嬌声が上がっていた。力が抜け、ぐったり頭を垂らす。
「はぁ、はぁ、や、やめて……こんなの入れ、たら……おかしくなる……」
それはもはや懇願に近い。自分で自分が分からない恐怖が大きくなっていく。
しかし小悪魔はあっけらかんとした微笑みを浮かべるだけで答えない。ゆっくり進めていた腰を少しだけ溜めて……なめらかに押し出した。
ずりゅ……ずぷぷぷっ！
深くまで一気に突き込んで、そこで中身を掻き回す。

「んんんあっ！　だめ、そこおおぉっ、動かな……っひぃあ！」
ごりゅ、ぐちちちっ！　くりゅっ！
さらに一歩奥へ。ペニスの先端が子宮口に当たって、まだ余裕のある長さでグリグリと押し込んでくる。入り口を肉塊に塞がれて……ゾクゾクゾクッと痺れる子宮。そこから発した熱が脈動に合わせて激しく疼き始める。
「く……ひゃふううっ！　中が、そんなっ、だめぇっ……ひゃあぁぁんっ！」
上気した頬をひくつかせ、霞は視線をさまよわせていた。まだあかねはペニスを入れただけにすぎない。なのに霞は、自分がどうなっているのか、なにを叫んでいるのか分からなくなるほど頭が混乱している。
「あははっ、すごい乱れっぷりだねっ。んじゃ、本番いくよー？」
「あ……えぁ？　はぁ……あっ！　なに、これぇ……っくふううううっ！」
ずちっ！　ぶぶぶっ！　ぷちゅううっ！
一息に抜き出された性器が再び中へ。リズムに乗ったピストンが開始される。
「はふぅ！　すご……すぎ……きゃはぁう！　おなかの中がっ、一番奥がっ！」
霞の表情は挿入前と一変していた。恐怖を浮かせながらも、同時に悦楽もはっきりと表情に刻んでいる。だらりと垂れ落ちた舌は糸を引く涎を長く垂らし、大きく開いている瞳にはどこを見ているのか分からない揺れ。宙ぶらりんの霞は突き込みのたびに大きく身体を揺らし、顎を突き上げ艶めかしい喘ぎを漏らし。突き込まれた肢体がくねりながら前へ

押し出され、まるで振り子のようにあかねの腰に叩きつけられた。
「あうううっ！　だめだめだめぇ！　擦れるっ、中身が擦れて……めくれるうっ！」
突き込まれればぶちゅっと愛液が飛び散り、引き抜かれれば狭隘な膣道がさらに狭まる密着感。霞が快楽を感じる最も適した大きさに設えられたペニスは、膣壁とぴったりで少しの隙間もない。引き抜かれる際には真空状態のように膣内が縮んで粘膜が肉棒に絡みつき、代わりに空気の入り込む恥ずかしい抽送音が鳴り響く。
ぶぢゅ！　ぶぶぶっ！　くち、ずるるるっ！　ぐりゅううっ！
「やめてぇっ！　あうううっ！　ひっ、んんっ！　助けて、っんひぃ！」
「あははっ、いい声！　霞ちゃんもそんな声出せるんだ！　もっと鳴いて……ねっ」
ずぐぐぐっ！　にゅぷんっ！
最奥まで到達した異物がひねりながら引き抜かれ、その凹凸が膣粘膜をぞぞぞ……と擦っていく。性感帯を集中的に責められる充実感と、全身が竦み上がる強烈な喪失感が交互に訪れて頭が変になりそうだった。
「うはぁ……あ、あああ！　深いっ、深すぎ……先が奥にぃぃ！」
首を振りたくって目を見開いて。強烈すぎる刺激に耐える様からはあの凛々しい霞を思い浮かべることはできない。
膣壁を掻き分けて突進してくる触手ペニス。本物の肉棒のように脈打つ肉茎が粘膜壁を押し開いて、あっという間に奥まで到達し彼女に恥辱の高ぶりを強いてくる。

「ひあぁ……お、おしりダメェっ！　そっちはぁぁ……！」
ペニスに合体しなかった触手がくりっと菊座をほじり返した。少し押し込まれただけで、なんの抵抗もなく先端を呑み込んでしまう霞のアナル。むしろ悦ぶようにひくついていて――ズルズルと進入してくる触手のうねりに頬すら緩ませてしまう。
霞はその充実感に身を委ね始めている。肉体だけでなく、その精神すらも。
ふたなり少女から生えたペニスがぐんっと持ち上がり、波打つような動きを先端まで伝播させて……ぐじゅっ！　尻側の触手と協力して肉壁を挟み込む。
「ふあっ！　挟まれてる……ひううっ！　んひぃっ！　あ……だめぇぇぇっふううっ！」
ビクビクビクッと肩を跳ねさせた少女は絶頂に達していた。
「あはぁ……あ？　くふわぁぁぁ……！」
だが――まだ軽い。硬さが抜けてぐんにゃりたゆたう身体は満足しきっておらず、下腹を掻き回されっぱなしで体内の疼きは蓄積される一方だ。
「もうイッちゃったの？　でも、まだまだ満足できないよねっ？　ほらほらほらぁ、何回でも、気を失うまで犯してあげるよっ」
ぐじゅるるっ、ぶぶっ、づぷん、ずるっ、ぶぷぷぷっ！
「ひぎっ！　あふ！　ま、また……いやぁ、もういやあぁぁ！　やめてぇ……っ！」
抽送は速く、うねりも激しく。延々とうねり続ける触手で肉ヒダがざりざり擦られる。
拒絶を叫んだ霞も一瞬で眉尻を落として弱々しい表情になると、息も絶え絶えの呼吸を

すぐに切なげな吐息に変えて漏らし出す。
「いやらしく腰を揺らしてる霞ちゃんのおま〇こ、愛液でドロドロだよぉ？」
「やめて、そんなこひゃああっ！　あんっ、そんなことなひっんん！　はぁう、はぁはぁ、んんんっ……！」
あかねの挑発的な言葉に、変わってしまった自分の肉体を実感する。胸の奥にしまい込まれていたものが、熱くたぎってドロリと濃厚な臭気を漂わせた。比例したように、抜挿動作にめくれ上がる膣口から溢れる愛液が量を増してぴゅるぴゅるとしぶいている。
彼女の理性を薄れさせ身体を火照らせる架空の匂いと、実際に彼女の身体を包む汗や股間から漂う甘酸っぱい体液の匂い。それらが混じり合って、自分というものをこれまで無意識に抑え込んできた少女の脳裏に濃い靄を垂れ込めさせる。
甘い痺れが下腹部から盛り上がってきて、四肢の先端まで行き渡っていた。足の甲はピンと伸ばされ抽送に合わせてピクピク跳ねて。その唇からはせっぱ詰まった悲鳴と甘い吐息とが交互に漏れ出る。
「はふ、んっ……！　あふ……んっ、んんぁ、ひっ、あああ！」
止まることのないピストンのたび、豊満な肉体がかくんかくんと宙に揺れる。制服からこぼれるむっちりした質量の乳肉が、ぶるんぶるんと大きく弧を描いて俯き加減の顔にまでぶつかりそうだ。
（あ……ああ……、もぉ、だめぇ……また絶頂、するぅ……！）

全身に行き渡る快悦にぼんやりと思う。しかし、それに抗うつもりはもうなかった。
「はっ、はぁ……んぅ！　イクぅ……っ、イッてしま、んふううう……！」
淫裂から愛液をこぼし、突かれるがままに身体を揺らしている霞。わずかに震える唇をぱくぱく開閉させて、身体の芯がチリチリ火花を散らして疼く感覚を受け入れて。
「イッちゃえイッちゃえっ！　あはははっ！」
あかねが強めの責めに出る。入り口近くで激しく出し入れを繰り返し……。
「はひっ、はう、んっ、くふぅぅ！　はぁ、んっ、んんっ！　くる……ッ、ああっ、くるうっ……！　ふわあぁぁう……っ、くるううう！」
霞がもどかしげに身体を縮めたところを狙って——深く突き入れた。
ぐりゅ、ずちゅううう！
膣肉がなにかを求めてきゅううっと強烈に収縮していた。それが一気に痙攣を起こしペニスにむしゃぶりついて……ふわりと浮き上がる感覚で目の前が真っ白に弾ける。
「あ……あああああああっ！　イ……クぅぅ……！」
霞の背が反り返り、広がった股間から足先までがぷるるっと震える。その表情は驚いたように目を押し開き、唾液に濡れそぼった唇からは涎をしぶかせそうな勢いで……。
霞は満足げに微笑んでいる——。
「ひうううう！　あ、あはぁ……ッ！　イクぅ！　イクうううううううっ!!」
すべてをなげうった少女の、快楽の絶叫が迸った。

『第四章　淫獄の淵』より

ずちっ、ぐちゅ、ぶぶぶっ！　ぶちゅ！　ずる、にちちっ！

男の胸に手を置いて、少女は身体を大きく跳ねさせた。反った背から尻までの緩やかなラインを波打たせて、時に激しく、時にゆっくり擦りつけるように腰が踊る。

「うふふっ、すごい音がしてるよ霞ちゃんま〇こ！　はしたないねっ、恥ずかしいよっ」

嘲笑するあかねの触手がずるり、まとわりついてきた。撫で上げられる肌がみるみるうちに汗を浮かせ、挿入のたびぶちゅりと泡立つ愛液が甘酸っぱい発情臭を漂わせる。

（あはぁっ、私のアソコ、こんなに音を立てて……ぐちゅぐちゅってしてる……）

嘲弄されて、羞恥心を刺激されるのがどうしてか心地よい。自分で自分を卑下するだけで、周囲の視線にこんなにも身体が震える……。

腰をくねらせるとペニスがグニャグニャ中を掻き回してくれる。男の動きに合わせて腰を下ろせば亀頭がこりっと子宮口をくすぐった。そのどれもが甘やかで刺激的で、全身に広がっていく疼きがたまらなくもどかしいのに愛しく感じる。

体力が尽きて倒れていく人間たちの中で延々と喘ぎを響かせ続ける霞の周囲には、妖魔から人間まで多くの者が集まっていた。みな獣のような喘ぎを響かせる獲物の少女に欲情し、勃起したそのペニスもずらりと並ばせている。

（ふぅ……あ、ああぁ……おちん、ちん……精液……）

林立するペニスへゆらり、少女は手を伸ばす。嫌悪すべきその肉棒へ、ひとりでに舌が伸びていくのが止められない。

（んっ、はぁぁ……、この味、匂い……感触……）
ぞくりとする身体――生気の暴走状態にある肉体が精液を求める渇望を抑えられない。身体を揺らすとトロリと垂れ落ちる粘液から生気の波動を感じる。肌に貼りついたそれは触れているだけで心地よい満足感を湧き出させ、腰の奥にあるものを疼かせてしまう。
ちゅぶ、ちゅ……ずずっ、ずるずるっ……ちゅば。
ねっとり濡れた唇が尖り亀頭に吸いついた。粘つくものをちゅるっと啜り、その臭みに喉が悦んでいるのを感じて充足感に身を震わせる。
「んは、む……んっ、ふうぅぅ」
ちゅばちゅばとついばむ音が激しくなっていく。
指の中に搦め捕ったのは見たことがある生徒のペニス――霞と同じクラスだった気がするが、もうそんなことどうでもいい。剛直を引き寄せるようにして、自ら顔を寄せ……、
ぶちゅ、ずるるるっ！
「んぶうっ、むはぁ……んっ、ふうう、んぐむ……！」
むしゃぶりつくといった形容がぴったりの吸いつきが、いやらしい音を立てていた。
鼻を突く異臭をものともせず首をひねって舌を伸ばし。密着させた腰を前後に揺らしながら、伸ばした舌でペニスへ絡みついてそのまま……ずるずると呑み込んでいく。
「んぐ……んぐ、む……ふぁあ、くふぅ……」
丸く開いた唇を窄めずるるるっと強めに吸い込むと、男の獣めいた呻きに続いて発情し

っぱなしだった肉棒が喉の奥でぴくぴく跳ね踊った。
味わう間もなく、喉の奥の方にぶくりと膨らむ射精の証……。
びゅくびゅくっ！　どぷぷぷっ！
唇から弾けるように飛び出た亀頭から弧を描いて降ってくる粘つく白濁汁。それを顔面で受け止めた霞がうっとりと表情を緩める。
（っあぁ……ぬめぬめしてて……匂いを嗅いだだけで、こんなに……っうう）
精液に触れただけで、ずくんずくん、と子宮が疼いていた。膣洞もぐにゃりとねじれるような蠢きでペニスをしゃぶり、尻穴がひくひくっと皺を震わせる。下腹全体が熱を持ち、くびれた腰が勝手にくんっと持ち上がってしまう。
（はぁぁ……んっ、ドロドロになるの、すごくいい……）
霞はもう一方の手にもペニスを引き寄せ扱き上げながらも、射精直後の性器も放そうとしない。柔らかくなっていくペニスが不満だとでも言わんばかりに唇に当てて……ぷるぷると唇で弾いて、舌をちろちろ踊らせて。
ちゅずずっ、にちっ、ちゅぷ、ぷぷっ……、ぶじゅるるる！
射精を終えたにもかかわらず、そのペニスに這わせた舌の動きは激しくなる。
ほんの数日前に初めて経験したフェラチオはあんなにぎこちなかったというのに、躊躇いの消えた今は舌の動きがなめらかに、艶めかしい動きを見せていた。
小さくなっていく亀頭を覆うように当たった舌が、それを撫でるように舐め回す。唾液

は自然と湧いてきて、糸を引く音を響かせる唇はむっとする匂いの亀頭へと何度もキスを降らしていた。そうすれば、すぐに勃起が復活すると知っていたから。

射精後の縮小で一時的に小さくなっているペニスをぱくりと頬張る。羞恥心や屈辱感は湧いてこない。さっきの勃起状態に比べても、ごくごく簡単な行為だ。

ちゅば、ちゅぼぼっ！　にちにちにち……ちゅ、ずるる……ちゅばっ。

「はぁ、ん……っむ。んっ、はぁぁ、はぁ……早く、おおきくっ……ふうっ、んむぅ……してぇ……ふぁむ、んくっ、んく、あうぅ……んっ」

ちょうど口腔にすっぽり収まるくらいのしなびたペニスを飴のように執拗に舐め回す。頬をもごもごさせて、口蓋と舌の上で挟んだ亀頭を咀嚼するように転がして。

ずるるっ、ちゅるちゅる……ちゅぱっ、ちゅううっ……。

尿道に残ってまだまだ滲み出てくる液体をずるずると啜り飲んでいる。精液の味と感触で、肌の中がじんわりと熱く、全身はふわふわと心地よくなって……。

一転して血流が戻り始め、口の中で力を取り戻し始めた肉棒を感じる。途端に眉尻を淫らに下げてしまう退魔少女。

「わかるよ……？　男の人の精液が欲しくて欲しくてたまらないんだよね？」

どこからか響いてくるあかねの囁き。霞にまとわりつく触手がウネウネ這い回る。くすぐったいだけの刺激なのに、ヘソの穴をくすぐるようにした触手がくびれた腰から下乳へ、そして柔乳の丘陵をつううっとなぞり上げるだけで、括約筋はきゅっと痙攣して蜜壺は汁

を流し、伸ばした舌から涎が滴って止まらない。喘ぎ漏らす声はひどく艶めいていた。
「んふぅ、あ……そ、そこ、そんなに撫でないでぇ……！　んぅ！　あ……ああ」
妖魔の手が、触手が、そしてペニスが全身にまとわりつくような感覚――。
錯覚かと思われた感覚だが、すぐにそれは現実となった。大勢の男たち――ペニスに霞は囲まれ、手や性器をそこかしこになすりつけ始める。息ができないほどの性臭は霞を中心に漂い、はだけた肌の上はヌルヌルの液体で塗り込められていく。
――それが気持ちいい。
「んぶ、ふううっ……あぁぅ、顔も、髪も……こんなに……ぃ」
それどころか胸元も脇も愛液の混じる腰回りも。オーバーニーソックスで包まれた足も粘液を吸ってベトベトだ。さらには、触手液の浸食が進んで制服はどんどんボロ切れのようになっていく。質量を感じさせるねっとりした液体はその布地に染み込んで肌を透かし、厚手の生地を通してすら肌色が色づいているのが浮かんでいた。
抱きついてくる男に胸を揉まれながらも、腰をゆらゆらと回し貪欲にフェラを続ける霞の顔に、またしてもペニスが精を吐き出した。
心地よい熱さに瞳を震えさせた少女の顔で精液の残滓を拭うように、射精直後の亀頭が頬を抉り込む。整った鼻筋にぶにぶにした牡肉が押しつけられる。
「あぁ……んぐ、ぶぶ……ふぁ、ひゃめぇ……！」
鼻頭が鈴口に嬲られている。残滓がすぐ下の鼻孔に垂れ落ちてくる。呼吸を邪魔されて

いるのに、その強烈な性臭が脳を蕩かしてなにも考えられない。
「ひゃっ！　あ、ああ……こんなにいっぱい、精液が……ぁ」
歓喜にもとれるような呻きをこぼし、退魔少女は今まさに放出され、トロトロと流れ落ちていく乳房の上の白濁を見つめる。
それをねとり……ねちょりと。血管をどくどく脈動させる触手が肌に塗り広げた。降りかかる液体で濡れそぼって、霞はまるで水浸し。次から次に湧き出る汗と片っ端から混ざって臭みを増した独特の牡臭で他の匂いを嗅ぎ分けられない。
「やっぱり霞ちゃんは素質があるんだよ。あたしと同じ……もう、男の子のおちんちんなしじゃ我慢できない身体なの。そういうの淫乱って言うんだよ……？」
あかねの囁きは続く。空っぽな頭の中に、その言葉はスムーズに染み込んで……。
（男性器……おちんちん……もっと……）
もっとも、霞にはそんなことを冷静に分析する余裕などなく。急速に高ぶる肉の欲求をどうしていいのか戸惑いすら感じている。
（あふぅんっ！　はぁぁ……、精液がかかった先から、どんどん熱くなってく……。は、肌の裏側がムズムズして……疼いて、耐えられないぃ……！）
気持ちいいのにもどかしい感覚に懊悩する少女。その胸が、ぎゅっと掴まれた。
「はぁはぁ、んんっ！　ひぃ、む、胸がぁ！　そ、そんなに強くしないでぇ！」
緩やかな快楽漬けで熾火のような昂ぶりに満たされていた身体が、一変した強い刺激に

混乱の悲鳴を上げている。力の強い妖魔の腕が自分の乳房を掴んでいるのを見て、その相手をやっと認識する霞。

（んく……ぁ！　よ、妖魔に、こんな……ことされて……）

なのに――ざわりと乳肉が騒ぐ。精液でコーティングされた乳房は、その豊かな大きさ、つんと張り詰めた形も相まって肉の持つ美しさを強調したような姿だった。

（胸が、んくっ！　ひ、ひぃ……痛いのに、こんなにジクジク疼いて……！　くひっ！）

魔物の大きめの手の平でぐにっと握り締められた乳肉は、その柔らかさを溢れんばかりに指の間からはみ出させている。ぱんぱんの水風船が握られたごとく張りのある肉を歪められ、チリチリ痛みを訴えていた。

だがそれを遥かに上回るのは、こんこんと湧いてきてしまう疼きがすっと解消されていく一時の快楽。身体の内側でぐすぐずと燻っていた炎が、あれほどもどかしかった感覚が――乱暴な愛撫でこの上ない快感に昇華される。

「ひきぁ……あ、はああっ！　おかしくなるっ、おかしく……ひんっ⁉」

身悶える身体が、跨った男へと前のめりに崩れる。

密着させ揺らすだけだった腰が前傾して浮き上がり、抜け出る亀頭カリで膣内がぞろりと擦り上げられた。その悦感にぶるぶると震えた尻肉が掴み込まれる。ひらひらしていたスカートがまくり上げられ、後方へ持ち上がっていた肛門の窄まりがさらけ出された。

（お、お尻がっ、せっかく収まってたのに、お尻がまたぁ……！）

後ろに回り込んだ人間がアナルに挿入しようとしている――それを感じたのは、菊座にぬるりとした亀頭の感触を感じたから。そしてむにりと……硬い肉棒先端が押しつけられ周囲の皺が押し込まれたからだ。

「あっ、ひぃあ……ああ……！　ひゃめ、て、んんっ！　んぐ……ふぁ……むううっ！」

なにに対してなのかよく分からない恐怖を感じて、振り返ろうとした顔にペニスが追突。そのまま再度口をペニスで封じられ、彼女は騎乗位で背を反らせ尻を持ち上げた体勢のまま身動きを封じられた。

（ひぁ、うううぅ……あ、開いちゃう、お尻の穴が……もう、だめぇ……！）

前門と同じくらいの感度に開発されているアナル。それがひくついている。

（お尻、開いちゃうっ！　硬いの……おちんちん入ってくるうぅぅ！）

肉棒の感触に触れただけで条件反射のようにひくつき皺の窄まりを緩めた肛門が……亀頭にぎゅっと押し込まれた。途端、皺の中心がにゅぷりと門を開けてしまう。肉槍が進めば進むだけ、ペニスの太さと一ミリの狂いもなくぴったり貼りつくようにしながら。

ぐぬぷぷぷ……ずるんっ！

（はぁぁ、んんっ！　は、入っ、ひんっ！　は、入ってしまって……るぅ！）

直後、自分が怖かったのはこれだと霞は納得した。それは同時に、彼女が心の奥底で求めていたもの――。膣と尻穴と、二倍になった快感が腰から下の感覚を塗り替える。

「ぷはっ、ひゃああぁ！　そ、そんな、んんんっ！　お尻もっ、おま〇こもぉ……！」

ゾクゾクゾクっと身体が痺れる。でたらめに押し込まれてくる尻穴ペニスはすぐに奥まで到達すると、今度は逆に引き抜かれていって……。ひっと息を呑んだ霞が身をよじらせれば、ヴァギナに埋まったまま大人しくしていたはずの肉棒が騒ぎ出す。

息を吸っていいのか吐き出すべきか混乱してしまうほどの錯乱状態で、霞は顎を上向かせてゆらゆらと頭を振る。黒髪が吸っていた汗がきらきらと宙を舞い、代わりにドロドロしたものがあちこちから塗りつけられた。

「くふううっ！　つよすぎ……んひいっ！　あはぁ、か、身体中が……んひゃああっ！　ちくびっ、やあああーっ！」

乱暴なピストンの勢いにぶるんぶるんと円を描く乳房も容赦のない責めに晒されている。波打つ乳肉の上に弾む肉豆がこりっと摘み上げられ、三つ目の性感帯が激しく火花を散らしてチリチリした悦感で霞の胸を焼き焦がそうとしていた。

「んひいぃ――っ！　はぁ、んんんっ！　やめて、やめてぇぇ！」

それひとつでもこらえきれそうもない快感に彩りを添えるのは、白く美しい肢体のそこかしこにまとわりつき、巻きついてぎちぎちと締めつけてくる触手の脈動。血管のような凸凹がとくんとくんと脈を打つたび、腐肉色の表面からはぶじゅぶじゅとゼリーめいた粘液が噴き出してきて……全身にローションのシャワーを浴びせられたようなずぶ濡れ感。腕を動かせば脇の下がぬるりと粘ついてもどかしく、息を吸えばズルズルした液体が鼻にも口にも入り込んできて……ぷちぷちと小さな泡の潰れる音が響く。

「ひゃふう、んぐ……！　む、無理ぃ、息がっ……っんむううっ！　んむぅう――っ！」
はぁはぁ喘ぐ口に強引なフェラチオを押しつけられ、下腹の気持ちよさと息苦しさで悶え狂う退魔少女の身体。ガクンガクンと突き動かされる細い身体は衝撃を吸収しきれず、抜け出ては呑み込まれを続けるペニスは口の周りをベトベトにして暴れ回る。
しかし突き上げられるたび途切れる言葉とは裏腹に、その表情は苦しみの中に浮かぶ快楽を隠しきれない。唇は暴れるペニスを内部にくわえ込んだ途端に窄まり、押し込められた舌は汁を一滴も逃すまいと跳ね踊るのが証拠だった。
「ふうっ、ひいい……んんっ！　ふわあぁ……ああ……」
下方と後方から突き上げる二本のペニスに腰のくねりが合わさっていく。きゅっとくびれた腰がうねうね揺れて、まるで二本のペニスと協奏曲を奏でるように調子を合わせて。
「ふわあぁっ……あっ、あはあっ！　くっ、くるうっ！　ひぃっ、あはぁ……っ！」
退魔少女の肢体はみるみる興奮の度合いを増して臨界付近を漂い始めていた。心臓がドクドクと暴れて収まる気配がない、大きく揺れる視界は歪んで思考を掻き乱す。噴き出す汗も心地よく、あちこちから塗りつけられる粘液が至高の香りで頭を麻痺させる。
じゅぶっ！　ずるるるっ！　にちゅ、ずずっ、ぐちゅうううっ！
「イッちゃう、イク、ひぃぃんっ！　やっ、はぁぁうっ！」
急に押しつけられた男の腰がヴァギナの奥深くまでを抉り、ぶちゅぶちゅっと大量の愛液が太腿を流れた。快楽がきゅんっと子宮に集約し、ざわりと波打って絶頂の訪れを知ら

せてくる。ぐっと息を止めた霞が、こらえきれない感情の奔流に背を丸めた。
直後……弾けたように身体を跳ねさせる少女。
「イクううっ！　ひゃ、イクイクうううううっ！　はぁうっ、んはぁんんーっ！」
ビクビクッ！　二穴を抉られた勢いで前のめりに倒れ伏した少女の肢体が、男の身体をクッションにふるふると痙攣する。
越えてはならない、しかし越えずにはいられない一線を越え、束の間の絶頂で少女は短い呼吸を喘ぎに混ぜる。だが……二本差しの肉棒はそれに追い打ちをかけてきた。
「ひはぁっ、はぁはぁ、ふうっ……⁉　えあっ、くぅ、ひぃいっ！　んんんーっ！」
ついでとばかりに射精し始めた二本のペニスの感覚で、下腹が急に膨れ上がるような錯覚に囚われた。二つの穴をこれでもかとほじられ、二倍の快楽に狂気じみた快楽を感じていた少女の身体が――余韻に変化して静かになりかけていた性感を激しく毛羽立たせる。
「ふぁあっ！　な、中に出てるうっ！　両方ともっ、っあああん！　すごいっ、おちんちんビクビクしてぇっ、いっぱい出してる……ぅ！」
持続する絶頂が、抜けた腰をますますふにゃふにゃにしてしまう。手足はおろか全身のあらゆる場所に力が入らない。指の一本も動かす余力がない。
彼女の意識の代わりに全身を支配しているのは、抗い難い快楽の津波だ。
「ひっ、ひいいぃ……！　びくびくっ、してぇ……止まらないっ、ひっ、あああぁぁ！」
ぷしゅっと無色の潮をしぶかせて腰が痙攣する。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!
◎期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/